

温室効果ガス削減実施状況報告書

1 事業の概要

(1) 事業所の名称

福山リサイクル発電株式会社  
福山リサイクル発電所

(2) 事業所の所在地

広島県福山市箕沖町107番8

(3) 業種

ごみ処理業 8816

2 計画の期間

本計画の期間は2006年度を基準年度とし、2019年度から2023年度までの5年間とする。

### 3 温室効果ガスの総排出量に関する数量的な目標の達成状況

《排出量を削減目標とする場合》

単位：排出量 (t-CO<sub>2</sub>)，削減率 (%)

温室効果ガスの種類	基準年度実排出量 (a)	目標年度 上段：見込量 (b) 下段：削減率 (c)	計画期間の実績 (上段：実排出量(d)，下段：削減量の対基準年度比 (e))					
	2006年度	2023年度	2019年度	2020年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度	平成 年度
エネルギー 起源CO <sub>2</sub>		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
非エネルギー 起源CO <sub>2</sub>		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
メタン		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
一酸化二窒素		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
その他 温室効果ガス		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
温室効果ガス 実排出量総計		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
温室効果ガス みなし排出量								
実績に対する 自己評価								

※ 削減率(c) = ((b)-(a))/(a) × 100 削減量の対基準年度比(e) = ((a)-(d))/(a) × 100

《原単位を削減目標とする場合》

原単位算定に用いた指標： 売電量 (千kwh) 当たりのCO<sub>2</sub>排出量 (t)

温室効果ガスの種類	基準年度の実績 (a)	目標年度 上段：目標 (b) 下段：削減率 (c)	計画期間の実績 (上段：原単位実績(d)，下段：削減量の対基準年度比 (e))				
	2006年度	2023年度	2019年度	2020年度	2021年度	年度	年度
エネルギー 起源CO <sub>2</sub>	0.04528	0.03426 -24.3	0.03214 29.0	0.03586 20.8	0.03477 23.2	100.0	100.0
非エネルギー 起源CO <sub>2</sub>	0.63212	0.62644 -0.9	0.62274 1.5	0.64087 -1.4	0.65459 -3.6	100.0	100.0
メタン		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
一酸化二窒素	0.04430	0.04094 -7.6	0.03999 9.7	0.04176 5.7	0.04237 4.4	100.0	100.0
その他 温室効果ガス		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
温室効果ガス 排出量総計	0.72170	0.70165 -2.8	0.69487 3.7	0.71849 0.4	0.73174 -1.4	100.0	100.0
エネルギー消費原 単位 (原油換算 kl)	0.05188	0.04836 -6.8	0.04141 20.2	0.04512 13.0	0.04558 12.1	100.0	100.0
実績に対する 自己評価	前年度に引き続き、ガス化溶融炉の補助燃料である石炭コークス使用量の削減を図ったが、施設のトラブルに起因し、発電に寄与しない化石燃料が増加したことで、全体としてエネルギー原単位の数値が上がった。						

※ 削減率(c) = ((b)-(a))/(a) × 100 削減量の対基準年度比(e) = ((a)-(d))/(a) × 100

4 温室効果ガスの排出の抑制に係る具体的な取組の実施状況

○ 温室効果ガスの排出抑制に向けた取組み

	項目	削減量等	具体的な取組み
1	補助燃料使用量の削減	RDF処理量は対前年度比0.6%微増した中で、補助燃料である石炭コークス使用量については、全体で0.9%の減少。また、発電に供したコークスは2.2%の減少であった。これは、発電用コークス使用量は削減措置を継続した結果が得られたものの、設備トラブルの発生による立下・立上に要するコークス使用量が増加したことが要因と、思慮される。	2018年度より実施している溶融炉内への送酸量・濃度の見直し等を含むRDF処理量に対する補助燃料である石炭コークス使用量削減措置を2021年度も継続した。
2	電気使用量の削減	前年度に引き続き、機器運転等について使用量削減措置を徹底したが、結果として対前年比、1.3%増加した。これは、設備トラブルによる操業停止時の工場内補器等の運転時間増加等に依り、全体として発電効率が低下したと、思慮される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・空調機運転について冷房設定温度28℃、暖房設定温度20℃とし、管理を徹底した。</li> <li>また、冬期操業中のタービン発電機室より発生する熱の一部を管理棟の暖房に使用した。</li> <li>・照明について安全性に配慮しながら、不必要照明器具の消灯を徹底した。</li> </ul>
3			
4			

○ 温室効果ガスみなし排出量の抑制に関する取組み（環境価値の活用等）

	種類	合計量
1		
2		
3		

○ その他の取組み

	項目	削減量等	具体的な取組み
1			
2			
3			

※ 環境に配慮した実践的な取組みなどをされていれば記入してください。